資料2　パブリックコメントでの胆振東部地震に関する指摘に全く答えらえていない;「科学的特性マップ」の根本的な誤り。

＊胆振東部地震が、石狩低地東縁断層によるのなら、断層の地表での全長の 100 分の1をはるかに超えた場所で起きている。

＊NUMO が言うように、胆振東部地震が石狩低地東縁断層と無関係なら、地震は「科学的特性マップ」では、これまで活断層が認定されていなかった「地層処分の適地」で生じたことになる。

小野のコメント:「破砕帯の幅として断層長さの 100 分の 1 程度」が学問的に間違いであることは 2016 年の熊本地震、2018 年の北海道胆振東部地震でも明らかである。断層の周りには無数のひび割れが生じ大きな破砕帯となることは常識でもある。同マップが作成されたのは 2017 年であるから少なくとも前者の地震については検証されていなくてはならない。また、胆振東部地震の震源は、約 150km といわれる石狩低地東縁断層帯から 15km 近く離れた場所である。150km の 100 分の 1 は 1.5km である。15km はその 10 倍である。「断層長さの 100 分の 1」は否定されなければならない。

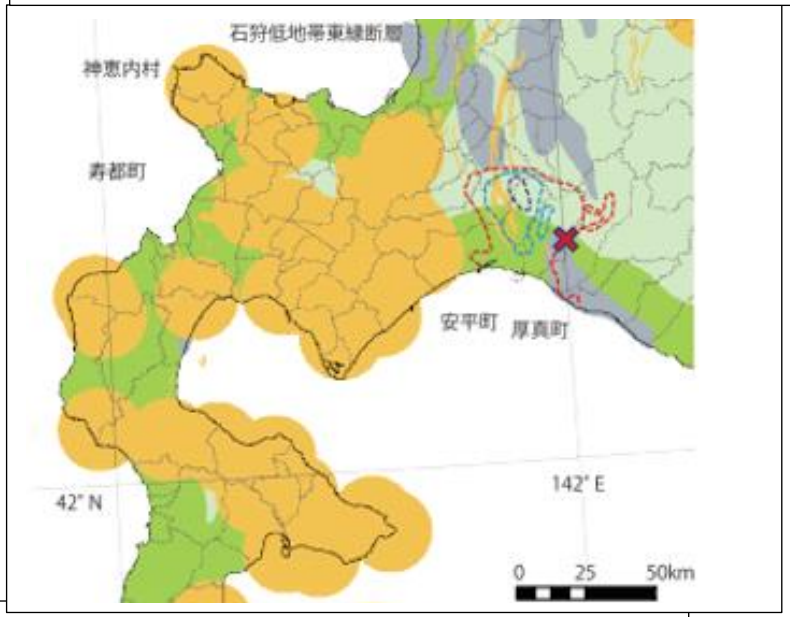
NUMO の回答: 胆振東部地震の震源の位置と、石狩低地東縁断層帯の破砕帯とは直接の関係はないと理解しております。（参考：地質調査研究推進 本部地震調査委員会「平成 30 年北海道胆振東部地震の評価」（平成 30 年 9 月 11 日））

NUMO の「理解」が正しいとするなら、胆振東部地震は、これまで活断層が認定されず、「科学的特性マップ」では「地層処分の適地」しかも「輸送面でも適地」とされた場所で起きたことになる。「科学的特性マップ」は、少しも「科学的」でなく、根本的に誤っていたことになる。

内陸地震は、これまで活断層が認定された場所だけで起きるとは限らず、そうでない場所でも起きており、将来も起きる可能性があることを遠田・石村(2019)も、遠田(2013)も指摘している。

認定された活断層の直上とごく近傍だけを除けば、地層処分の「適地」であるとする「科学的特性マップ」は、根本的な見直しが必要である。

能登半島も、「科学的特性マップ」ではすべて「適地」であり、大きな地盤隆起が起きた海岸地域は「輸送面でも適地」とされていたのである。



主要活断層を中心に行われた評価の裏をかくように，兵庫県南部地震以降，むしろ地表に明瞭な地震断層を伴わない被害地震が続発した．代表的な地震として，2000 年 M7.3 鳥取県西部，2004 年 M6.8 新潟県中越，2005 年 M7.0 福岡県北西沖，2007 年 M6.9 能登半島，2007 年 M6.8 新潟県中越沖，2008 年 M7.2 岩手宮城内陸地震が挙げられる．(中略)

しかし前節で紹介したように，最近 15 年間の状況を鑑みると，現状の評価システムでは，活断層の分布とその活動性評価によって M6.8 以上の内陸地震が予測できているようには見えない．これは筆者だけの指摘ではない．島崎（2008）も推本の予測結果と実際の地震発生頻度を総括し、活断層で発生する大地震の長期予測に関して，その過小評価を指摘している．また，地震断層が現れなかった地震や，後の時代のトレンチ調査では断層を認定できないであろう地震を「地表で認めにくい地震」として今後の課題の 1 つに挙げている．

日本列島内陸において気象庁マグニチュード（M）7 前後の浅部地殻内地震（以下，内陸地震）は必ずしも既知の活断層から発生するわけではない．震源データが記録されている 1923 年以降の M6.7 程度以上の内陸地震の半数以上は活断層以外で発生している（例えば，遠田，2013）．

遠田・石村(2019)第四紀研究、58, pp,121-136 より

遠田晋次(2013)「内陸地震の長期評価に関する課題と新たな視点」地質学雑誌 第 119 巻 第 2 号 105-123 ページ